

囲碁・将棋チャンネル 番組審議会資料
(第 26 回、令和 8 年 10 月 5 日開催)

1 開催年月日:令和 8 年 10 月 5 日(月)

2 開催場所:私学会館 アルカディア市ヶ谷(4 階 鳳凰の間 西)

3 審議委員: 7 名(出席 6 名、書面参加 1 名)

【出席委員】

朝比奈豊委員、遠藤龍之介委員、中村幸雄委員、兵頭俊夫委員、吉原由香里委員、
清水市代委員

【書面参加委員】音 好宏委員

【放送事業者側出席者】

今井 環(取締役会長)、山口哲史(代表取締役社長)、實諸祐一(取締役副社長)
岩田建一、望月陵、丸山啓太、山崎康雄(以上編成部)

4 議題

(1) 2 番組の審議

「第 4 期 新竜星戦 決勝三番勝負 第 2 局」(囲碁)

(2026 年 7 月 22 日 初回放送)

「藤井王将 vs 豊島銀河～読み筋公開対局 2026～」(将棋)

(2026 年 8 月 30 日 初回放送)

(2) その他の番組・特別編成などのご紹介

4 月)

「第 84 期 名人戦」第 1 局～第 2 局を生放送(当社初の放映権獲得)

「第 5 回 テイケイグループ杯 俊英戦」第 2 局を生放送

「棋力向上委員会 The PASSION!!」新しい 46 期生の放送がスタート

5 月)

「第 5 回 テイケイグループ杯 レジェンド戦」決勝を生放送

「第 84 期 名人戦」第 3 局～第 4 局を生放送

「ALSOK 杯 第 76 期王将戦」二次予選の模様を生放送

「G・W 特別編成」(囲碁枠・将棋枠)を放送。2 日～6 日の 12:30～18:00。

「霧島酒造杯 第 48 期 女流王将戦」本戦トーナメント放送開始

6 月)

「ヒューリック杯 第 97 期 棋聖戦」第 1 局～第 2 局を生放送

「ALSOK 杯 第 76 期王将戦」二次予選の模様を生放送

棋士特集「鈴木伸二特集」を放送

7 月)

「ヒューリック杯 第97期 棋聖戦」第3局を生放送
「第4期 新竜星戦」決勝三番勝負 第2局を放送
「第2回 柳風杯女流棋士トーナメント ダイジェスト」を放送
特別番組「藤井聡太DAY」。藤井聡太竜王・名人の誕生日である
19日に8:00～23:30まで出演番組を一挙放送
夏休み特別編成 アニメ「3月のライオン」(第1話～第7話)を一挙放送
8月)
夏休み特別編成 アニメ「3月のライオン」(第8話～第14話)を一挙放送
「藤井王将 vs 豊島銀河～読み筋公開対局 2026～」を放送
「ALSOK杯 第76期王将戦」挑戦者決定リーグ戦の模様を生放送
棋士特集「星合志保特集」を放送
棋士特集「申真諤特集」を放送
9月)
「第74期 王座戦」第1局～第2局を生放送
「ALSOK杯 第76期王将戦」挑戦者決定リーグ戦の模様を生放送
棋士特集「高尾紳路特集」を放送

5 審議内容

(1) 【囲碁】「第4期 新竜星戦 決勝三番勝負 第2局」に関して

(委員の意見)

- 持ち時間1分・1手ごと5秒加算のフィッシャー方式による超早碁は、圧倒的なスピード感とスリルがあり、ゲーム感覚に親しむ若い世代のニーズにも応える素晴らしい企画である。
- 男女混合棋戦において上野愛咲美女流名人が優勝を果たしたことは囲碁界の歴史的快挙であり、厳しい局面でも諦めない勝負強さや鮮やかな逆転劇が見応え十分だった。敗れた蕭鈺洋新人王の明るく潔い立ち振る舞いも清々しかった。
- 対局前のインタビューで上野女流名人が「気合を入れるために新しい服を買った」と語る場面や、普段は見学に来ない若手棋士が対局場到大勢駆けつけていた様子、30局以上の事前練習を積んで臨んだ熱意など、対局者の素顔や盤外の熱量が伝わる構成が非常に魅力的だった。
- 新竜星戦の実況中継は、実況解説のテンポもよく、また、画面を碁盤を中心に、蕭新人王、上野女流名人の二人の表情、二人の手元、それぞれの持ち時間と分割して見せるなど、見る側が関心ある情報を上手く織り込みながら中継しているところはさすがである。
オープニング、総評などで、MCや解説者はもう少しカメラを意識して、身体の向きを決めるなどしながら進めるのがよいと感じた。
- 他のネット配信等で見られるように、控室で他のプロ棋士がリラックスしてお菓子を食べながら対局をざっくばらんに検討・論評する様子など、勝負の裏側のサイドストーリーを別枠やサブ

チャンネル等で見せると、さらにエンターテインメント性が高まるのではないかと。

- 陣地の成り立ちを示す「AI 勢力図」は、囲碁を知らない初心者にも盤面の優劣が直感的に伝わり非常に分かりやすい。一方で、黒白の確定地と未確定地(薄い陣地)の境界や中間の濃淡表現、死に石の表示方法など、視覚的な識別性にはまだ改良の余地がある。
- 「目差表示」が併記されている点が優れている。終盤に AI 評価値が「99 対 1」といった極端な数字になっても、実際の盤上ではわずか「0.5 目差」の超僅差であるというプロの高度な戦いが伝わり、視聴者の興味を最後まで引きつける工夫になっている。

(放送事業者)

- 「AI 勢力図」は、石の数ではなく囲んだ陣地の広さで勝敗が決まるという囲碁の本質を、ルールに不慣れな方にも一目で理解してもらえよう導入した。現在は AI が自動で着色処理を行っているため細かな微調整に難しさもあるが、確定地と未確定地のグラデーション表現や死に石の透過処理など、より直感的に伝わる表示方法を開発チームとともに研究・改良していきたい。
- AI の「評価値」は最善手を前提とした勝率を示すため終盤に一方へ偏りがちだが、実際の盤面ではわずか半目(0.5 目)を争う激戦であることも多い。そのため「目差表示」を同時に出すことで、大差に見えてもまだ逆転のチャンスがあるというプロの勝負の妙味を表現している。
- 撮影現場となった会議室を控室として開放したところ、多くの棋士が集まり熱気あふれる検討が行われていた。こうした舞台裏の様子や棋士同士のリアルな反応は魅力的なコンテンツになり得るため、番組本編や配信企画などでどのように活かせるか前向きに検討していきたい。

(2) 【将棋】「藤井王将 vs 豊島銀河～読み筋公開対局 2026～」に関して

(委員の意見)

- 対局者が別室に入り、相手に声が聞こえない状況下で、自らの読み筋や思考プロセスをリアルタイムで声に出して解説しながら指すという試みは極めて画期的であり、まるで人間ドラマを見ているように引き込まれた。
- トッププロが 1 分という極限の秒読みの中で、何十手先までの変化を驚異的なスピードで符号にして読み上げ、どの手を本線として選び、どの手を途中で見切ってボツにしたのかという「脳内の取捨選択」が可視化されたことは、将棋ファンのみならず知的好奇心を強く刺激する。
- 対局中に思考を言語化し続けることは極度のエネルギーを消費するため、対局者にとっては極めて過酷な負担であるにもかかわらず、真剣勝負としてこの大胆なオファーを引き受けた藤井王将と豊島銀河の 2 人に深く敬意を表したい。
- 通常の公式戦で見られる着物姿やスーツ姿とは異なり、カジュアルな私服姿での対局シーンが新鮮で、リラックスした佇まいと対局中の鋭い眼光とのギャップが魅力的だった。
- 藤井王将の読みが AI の最善手候補を一瞬上回る場面や、解説の高見七段らがプロの目線から思わず絶句・感嘆する様子など、筋書きのないスリルとリアリティがあった。
- 今回の思考開示の手法は、アマチュア強豪同士の対局や、過去の歴史的な名局(升田、大山、

中原など)の手順を AI 等で再現し当時の棋士の読みを推測するようなアーカイブ企画など、バラエティやドキュメンタリーを含めた様々な番組展開が期待できる。将棋だけでなく囲碁でもぜひ同様の企画を実現してほしい。

- 何と言っても「読み筋公開対局」という企画に惹かれた。藤井聡太王将と豊島将之銀河というビッグな二人が、勝負中に何を考えているのかを自身に語らせるというのは、将棋ファンならずとも、関心を持つだろう。話をしながら対局に向かうのは、やや負担もあろうが、藤井王将、豊島銀河とも、積極的に企画に協力をしているところも、「囲碁将棋チャンネル」のバリューであると感じた。この企画は、将棋の技を学ぶテキスト番組としても展開できるのではないだろうか。また、対局の二人を含め、私服での出演ということも、本人たちの素が出ていて興味深かった。

(放送事業者)

- 公式戦の放送では終局後のインタビューや感想戦でしか知ることのできない「対局中のリアルタイムな感情の揺れや思考」を視聴者に届けたいという発想から生まれた企画である。当初は引き受けてもらえるか懸念もあったが、両棋士が企画意図に深く賛同し快諾してくれたことに感謝している。
- 対面対局では相手に読み筋が聞こえてしまうため、オンライン遠隔対局のシステムを採用することで別室からの思考開示を可能にした。
- 喋りながら指す負担の大きさと番組全体の放送尺(約 2 時間)を考慮して持ち時間を設定したが、委員からのご指摘の通り、持ち時間を少し延ばして思考の深まりを見せるなど、今後の第 2 弾・第 3 弾のシリーズ化に向けて時間設定や見せ方のブラッシュアップを重ねていきたい。

(3)その他

(委員の意見)

- フィッシャー方式の超早碁では、秒読みに追われて対局時計を叩く動作がスリルを生む。左右どちら利きでも操作性のハンディが生じないような対局時計の設置・設備開発があっても良いのではないか。
- 新竜星戦のトーナメント構成は、1 回戦から話題性の高い注目カード(新旧対決や実力者同士の激突など)が巧みに組まれており、視聴者を飽きさせない番組編成の工夫が素晴らしい。
- 長時間のタイトル戦における序盤の深い研究と、早指し棋戦における時間の使い方の違いなど、プロの緻密な作戦や心理戦に焦点を当てた解説や番組作りを今後も期待したい。

(放送事業者)

- 新竜星戦では、「前期ベスト 8 枠(8 名)」「棋戦優勝者枠(8 名)」「レジェンド枠(8 名)」「特別推薦枠(8 名)」の計 32 名による選抜方式を採用しており、1 回戦で同一枠同士が当たらない組み合わせとすることで、魅力的な好カードが生まれるよう工夫している。
- 対局時計の配置や操作性については、カメラで時計盤面を同時に撮影・認識させるという物理的・技術的な条件もあるが、棋士がより対局に専念でき、かつ公平に力を発揮できるよう、

機材や配置の改良について引き続き前向きに取り組んでいきたい。

以上